Osaka University Knowledge Archive

Title	社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較
Author(s)	毛, 新華; 大坊, 郁夫
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 123-128
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3709
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

対人社会心理学研究, 8, 2008

社会的スキルの内容に関する中国人大学生と日本人大学生の比較[1)]

毛　新華(大阪大学大学院人間科学研究科)
大坊郁夫(大阪大学大学院人間科学研究科)

近年、中国と日本の間で、人的交流が盛んに行われている反面、異文化コミュニケーションのトラブルも続出している。このようなトラブルの解決策を講じる前段階として、中国と日本の社会的スキルの内容の比較を通して、両者の共通性と独自性を解明する必要がある。そこで、本研究では、このような比較を可能にするために、中国人大学生社会的スキル尺度の作成に用いられた中国人の社会的スキルの特徴を描く項目リストに基づき、日本人大学生を対象に調査を行った。日本人大学生から4つの因子が得られた。これらの因子の信頼性と妥当性を確認した上、既存研究の中国人大学生の結果と比較した。その結果、「社交性」因子の内容は両国の間で大きな違いはないが、他の因子の比較(中国の「相手の面子」因子と日本の「思いやり」因子、中国の「友人への奉仕」因子と日本の「つきあい」因子)では、重なる項目が存在するものの、因子を代表する他の項目の内容と合わせて考えることによって、それぞれの社会的文脈において、因子が異なるように解釈される。また、重なる項目の得点の比較においては、いずれも中国人大学生は日本人大学生より高いという結果になった。しかし、先行研究で指摘した日本人大学生の質問紙回答において自己卑下の傾向があることを配慮して、中国人大学生が日本人大学生より社会的スキルを備えているという結論には慎重であるべきであろう。

キーワード: 社会的スキルの内容、中国人大学生、日本人大学生、比較研究

問題

社会生活を営んでいる限り、人々とのつきあいをいかに円滑するかは、すべての人の社会生活において最も重要な課題の1つと言っても過言ではない。しかし、このような課題の解決はそれほど簡単なことではない。「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル(菊池, 1988; p.187)」を必要とする。社会的スキルは対人関係を円滑にするという役割があるゆえに、人々の対人関係の特徴を反映している(毛・大坊, 2006a)。

これまでの社会的スキル研究においては、社会的スキルは国や文化との関係が深いことが多くの先行研究で指摘されている。大坊(2003)では、文化において推奨されない行動パターンの表出を避けた方が他者との調和的な関係を築きやすいと主張し、社会的スキルが文化によって規定されることを示唆した。また、堀毛(1994)や高井(1994)は、日本文化とアメリカ文化との比較を通して、社会的スキルの内容を、どの文化にも存在する文化共通の部分とある文化にしか存在しない文化特有の部分に分けることができると指摘した。

中国と日本は「一衣帯水」の隣邦と言われている。両国の間に、古くから交流があり、近年では、「互恵関係」による経済、文化などの幅広い交流が行われ、人的交流がますます活発になってきた。これまでの文化のアプローチにおいては、中国と日本は同じ集団主義文化(Triandis, 1995)、高コンテキスト文化(Hall, 1976)に位置づけられ、中国人と日本人の行動様式は似ているとの考え方があった。この考え方に基づき、これまで、毛(2005, 2007)や毛・大坊(2007)では、中国と日本の間の社会的スキルの文化的共通性に基づき、社会的スキル尺度の適用を行った。日本の若者の基本的な社会的スキルを測定する社会的スキル尺度 KiSS-18(Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items)を中国の高校生および大学生に適用した。その結果、中国の若者の得点が日本の若者より高いなど、中国と日本の間での不一致があったものの、得点に性差はなく、年齢の上昇につれて得点が上昇し、内的一貫性および再テストなど信頼性の指標が十分であるといった中国と日本との一致点が多くある。これらの結果を踏まえ、中国人の若者を対象に、KiSS-18は通文化的尺度として、使用が可能という結論に至った。

その一方で、これまでの中国と日本の比較研究(天児, 2003; 村山, 1995; 中村, 1994; 園田, 2001; 末田, 1995, 1998など)では、日本人と中国人の行動様式にはある程度の類似性が見出されるものの、それ以上に違いが目立つとされ、両国の間に行動を律する規則や考え方、その背景となる慣習や価値観など、多くの異なる点があるとの指摘もあった。また、実際に、中日間の異文化コミュニケーションのトラブルは日本人ビジネスマンにおいても、中国人留学生においても報告されている(園田, 2001; 孫, 2004)。このようなトラブルの解決策を講じ、中国人と日本人のより良いコミュニケーションをはかるための前段階として、前述した堀毛(1994)や高井(1994)などで指摘した社会的スキルの特有性に基づき、中国人と日本人の社会的スキルの共通性と独自性を明らかにする必要があると考えられる。

中国の文化的特有性から、毛・大坊(2006a)は、在日の中国人留学生と在中国の日本人留学生を対象に、中国人の人づきあいの特徴に関する自由記述調査を行った。KJ法を用いて、中国人の人づきあいの特徴を描く記

述を96項目にまとめた。その上、毛・大坊(2006b)は中国人大学生 604 名を対象に、アンケート調査を行い、上記の 96 項目に基づき、中国人大学生社会的スキル尺度(Chinese University-students Social Skills Inventory: ChUSSI, 41 項目)を開発した。この尺度により、中国人大学生の社会的スキルの内容を 4 つの因子にまとめた。第1因子は「相手の面子(Partner's Mianzi: PM)」因子であり、得点の高い者は極力相手の面子を気にする。第 2 因子は「社交性(Sociability: SA)」因子であり、得点の高い者は社会活動では積極的である。第 3 因子は「友人への奉仕(Altruistic Behavior: AB)」因子であり、得点の高い者はより友達に尽力する。そして、第 4 因子は「功利主義(Connection Orientation: CO)」因子であり、得点の高い者は自分の社会的関係ネットワークを極力広げようとする。4 つの因子のうち、「相手の面子」因子、「友人への奉仕」因子、そして「功利主義」因子の内容はそれぞれ面子文化、恩の文化、そしてコネクション文化といった中国の独自の文化を反映している。これに対して、「社交性」因子の内容はこれまでの日本および欧米の既存の社会的スキル尺度にも存在し、文化共通的な内容となっている(Table 1 の左側の中国人大学生社会的スキル尺度の部分)。

日本においては、これまで、日本文化を反映した日本人の社会的スキルの内容として、人あたりの良さ(堀毛, 1994)や察知能力、自己抑制、上下関係の調整、対人的感受性、曖昧さへの耐性(Takai & Ota, 1994)などがあげられる。しかし、中国人と日本人の社会的スキルの比較の視点から、開発ベースの全く異なる尺度間での比較は不可能である。そこで、本研究においては、毛・大坊(2006b)の研究と同じ社会的スキルの内容リストに基づき、日本人大学生を対象に調査を行い、毛・大坊(2006b)での中国人大学生の結果と比較し、中国人と日本人の若者の社会的スキルの異同を明らかにする。

方法

調査対象者

日本人大学生: 490名(男子271名、女子216名、不明3名; 平均年齢 19.44 ± 1.33 歳)を対象とした。その内訳は、天理大学 290 名、摂南大学 129 名、関西大学 71 名であった。

質問項目および尺度の対訳

①毛・大坊(2006a)で作成した中国人の社会的スキルを描く96の項目(9件法、9に近づくほど自分が項目の内容に当てはまるとし、1 に近づくほど当てはまらないとした)、②若者の社会的スキルを測定するKiSS-18の18項目(5 件法; 菊池, 1988)、③非言語的な感情の表出性を測定する感情的コミュニケーション尺度(Affective Communication Test: ACT)の 13 項目(9 件法, Friedman, Prince, Riggio, & DiMatteo, 1980; 大坊, 1991)、そして④日本人の対人的コンピテンスを測定する日本的対人コンピテンス尺度(Japanese Interpersonal Competence Scale: JICS)の 22 項目(5 件法, Takai & Ota, 1994; 下位因子として、察知能力(Perceptive Ability: PA)、自己抑制(Self-Restraint: SR)、上下関係の調整(Hierarchial Relationship Management: HRM)、対人感受性(Interpersonal Sensitivity: IS)、曖昧さに対する耐性(Tolerance for Ambiguity: TA; 点数が高くなるほど曖昧さに耐えられない))、⑤その他、調査対象者の生年月日、出身地、性別、所属する学校、学部、学年などである。

尺度内容の中国語と日本語の対訳は日本の大学院に在籍し、在日歴5年以上の3人の中国人留学生によって行われた。

手続き

前述した日本人大学生に2005年5、6月に、心理学に関する授業にて、上記の質問項目を用いて作成したアンケートを配り、およそ 30 分で記入してもらい、その場で回収した。また、統計結果は授業の担当教員により講義の内容の一部としてフィードバックされた。

結果と考察

日本人大学生の因子分析の結果

毛・大坊(2006b)の中国人大学生のデータで検討した因子分析の手順に倣って因子分析を行った。まず、96項目のそれぞれの平均値(天井床効果)と分散(バラツキのなさ)を検討して、項目を削除した。その上で、KiSS-18を外的基準として導入し、その得点の高低群によって、候補項目の得点に差があるかどうかを検討し、有意差のない項目を削除した。

以上のステップを通して、残った 62 の項目に対して、探索的因子分析(SMC 法、反復主因子法、Promax 回転)を行った。複数の因子への負荷の高い項目、ならびに共通性の低い項目(0.20 以下)などを考慮して、尺度項目を選択しながら、繰り返し因子分析を行った結果、31項目が残り、固有値の減衰状況や解釈の可能性からそれぞれ 4 因子が抽出された(Table 1 の右側の日本人大学生の社会的スキルの因子分析)。

第 1 因子には「相手のことを尊重するように気をつけている」、「相手の面子を潰さない」、「私は細かいところまで人を思いやる」、「私はいつも相手の立場に立って物事を考える」、「いつも人と協調するように心がけている」など人づきあいにおける他者への配慮などを表す 12 項目から構成されたため、この因子を「思いやり(Sympathetic)」因子と命名した。Midooka(1990)は、日本的人間関係は

Table 1 中国人大学生社会的スキル尺度と日本人大学生の社会的スキルの因子

中国人大学生社会的スキル尺度(ChUSSI)

因子と項目	
第1因子：相手の面子(α=.89, 因子寄与=4.664)	
q85	相手のことを尊重するように気をつけている。
q72	私はいつもへりくだった態度でいるように心がけている。
q75	相手の面子を潰さない。
q25	私は相手の意見を尊重する方である。
q63	つき合う相手の短所に触れることを極力避ける。
q28	できるだけ相手が嫌がる話題や相手と意見対立しそうな話題を避ける。
q65	いつも相手の面子を立てるよう心がけている。
q38	いつも笑顔で人とつき合う。
q50	物腰が柔らかいとよく言われる。
q83	目上の人に常に敬意を表す言葉遣いをする。
q36	相手に遠慮する。
q37	人のプライベートなことにあまり触れない。
q88	いろいろ考えて、最も妥当な方法で目上の人や友達とつき合う。
q79	人と比べて、喧嘩したりなど争いごとが多い。※
q86	いつも人と協調するように心がけている。
q89	ばつが悪い時、私はいつも相手に引っ込みがつくようにする。
q52	人づき合いの中で、私はとても我慢強い方である。
q53	話をしている相手の長所によく触れる。
q13	私はいつも相手の立場に立って物事を考える。
第3因子：友人への奉仕(α=.72, 因子寄与=1.432)	
q34	友達と一体感をもってつき合う。
q66	友達との間で損得の衝突が生じた時には、相手に譲る。
q42	気前がよく、お金のことでけちけちしない。
q54	友達とのつき合いでは、自分がちょっと損しても構わないと思う。
q14	友達が困っている時に力を貸してあげる。
q70	よく友達を家に招く。
第2因子：社交性(α=.86, 因子寄与=3.065)	
q41	人と一緒にいる時、共通の話題をすぐ見つけることができる。
q09	見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。
q78	人見知りせず、どこでもとびこんでいける。
q06	私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている。
q10	人に暖かく接する。
q21	自ら人と親しくなろうとしない。※
q74	いろいろな人とつながりを持っている。
q90	自分から積極的に話しかける。
q30	人に頼りにされることがよくある。
q29	自分の話で人を笑わす自信がある。
q18	どうすれば周りの人たちをまとめることができるかがわからない。※
q62	誰とでも仲良くつき合うことができる。
第4因子：功利主義(α=.70, 因子寄与=1.547)	
q47	自分に役に立つ者と積極的につき合う。
q92	普段、私はできるだけたくさんのコネを作るように心がけている。
q80	私は人脈を重視する方である。
q32	飲食のつき合いをコミュニケーションの手段とする。

日本人大学生の社会的スキルの因子

因子と項目		因子負荷量 F1	F2	F3	F4	h^2
第1因子：思いやり(α=.87, 因子寄与=3.23)						
q85	相手のことを尊重するように気をつけている。	.771	-.130	-.117	-.034	.500
q75	相手の面子を潰さない。	.697	-.064	-.007	-.016	.451
q61	私は細かいところまで人を思いやる。	.652	.030	.016	.027	.451
q10	人に暖かく接する。	.597	.045	.231	-.069	.539
q13	私はいつも相手の立場に立って物事を考える。	.585	-.076	-.047	.135	.299
q93	友達をとても暖かくもてなす。	.567	.274	-.064	.044	.494
q55	相手はどう思うかわからないが、相手に対する友好的な気持を伝える。	.556	.040	.043	.049	.354
q53	話をしている相手の長所によく触れる。	.544	.033	.026	.051	.327
q86	いつも人と協調するように心がけている。	.538	.066	.054	-.211	.387
q25	私は相手の意見を尊重する方である。	.509	-.053	-.098	-.145	.258
q76	相手を喜ばすためにいろいろな方法を考える。	.473	.094	.144	.136	.391
q02	よく友達を助ける。	.444	.080	.023	.100	.257
第2因子：つきあい(α=.83, 因子寄与=2.05)						
q08	よく友人と食事に出かけたり、飲みに行ったりする。	-.185	.784	-.001	.064	.558
q20	一緒に食事やお酒の席を共にすることを大事にする。	.048	.755	-.081	-.010	.534
q15	よく友達と連絡を取ったり、一緒にショッピングに出かけたり、イベントに参加したりする。	-.077	.608	.166	.031	.482
q32	飲食のつき合いをコミュニケーションの手段とする。	-.026	.557	-.001	.053	.318
q34	友達と一体感をもってつき合う。	.155	.500	.133	-.068	.426
q82	友達とお互い、家のことやプライベートな話をする。	.096	.480	-.008	.013	.277
q70	よく友達を家に招く。	-.052	.469	.040	.051	.241
q59	私は、同郷などによる仲間意識がとても強い。	.109	.459	-.031	-.023	.243
q22	深く人とつき合うのがいやである。	-.066	-.536	-.010	.104	.307
第3因子：社交性(α=.89, 因子寄与=2.16)						
q09	見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる。	-.049	-.077	.969	-.007	.829
q78	人見知りせず、どこでもとびこんでいける。	-.050	-.082	.846	.043	.646
q90	自分から積極的に話しかける。	-.014	.018	.794	.096	.704
q62	誰とでも仲良くつき合うことができる。	.104	.098	.735	-.120	.649
q74	いろいろな人とつながりを持っている。	.106	.253	.504	.028	.548
q33	相手がただの知り合いから自分の親密な友達になるまでそれほど時間がかからない。	-.049	.236	.483	-.041	.374
第4因子：主張性(α=.74, 因子寄与=1.55)						
q19	いつも自分の意見や考えを表明する方である。	.054	.015	.109	.762	.665
q07	相手と意見が違っていても、自分の意見を曲げたり、相手に合わせたりしない。	-.071	-.058	-.084	.694	.450
q40	私は何でもストレートに言う。	-.022	.003	.045	.665	.467
q67	自分の意見を相手に納得させようと努力する。	.148	.156	-.038	.440	.273

※ は反転項目
因子寄与の数値はVariance Explained by Each Factor Eliminating Other Factorsによる

「和」の重視によって特徴づけられると述べている。この因子はそのような特徴と対応していると考えられる。調和された関係を追究した際に、そのような相手のことを十分に思いやる行動は日本人同士のつきあいに重視されていると考えられる。

第 2 因子は「よく友人と食事に出かけたり、飲みに行ったりする」、「一緒に食事やお酒の席を共にすることを大事にする」、「よく友達と連絡を取ったり、一緒にショッピングに出かけたり、イベントに参加したりする」、「飲食のつきあいをコミュニケーションの手段とする」、「友達と一体感をもってつき合う」など友達と一緒に行動するという9項目から構成されたため、「つきあい(Association)」因子と命名した。堀毛(1994)は、日本人は他者に対して否定的な意見・感情を表出せず、誰にも好ましい印象を与えようとし、いわゆる「人あたりの良さ」の傾向があると指摘した。「つきあい」因子はこのような「人あたりの良さ」を実現するために行われる行動であると考えられる。

第 3 因子は「見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる」、「人見知りせず、どこでもとびこんでいける」、「自分から積極的に話しかける」、「誰とでも仲良くつき合うことができる」など人づきあいの能動性を表す 6 項目から構成されたため、「社交性(Sociability)」因子と命名した。前述した中国人大学生社会的スキル尺度においては、同じ「社交性」因子が見られた。このことは「社交性」因子が文化を越えて存在する可能性を示唆した。

第 4 因子は「いつも自分の意見や考えを表明する方である」、「相手と意見が違っていても、自分の意見を曲げたり、相手に合わせたりしない」、「私は何でもストレートに言う」、自分の意見を相手に納得させようと努力する」という自分の言い分を通すことを表す 4 項目から構成され、

「主張性(Assertiveness)」因子と命名した。高井(1996)は日本人の社会的スキルの世代差について、年寄りの目から見ると、現代の日本の若者が過度に個人主義的で、自己抑制に乏しいと言及した。このような文脈においては、日本の若者からそのような一見して従来の日本人の行動様式に反する「主張性」因子が得られるのは妥当な結果であると考えられる。

尺度の信頼性

4 つの因子のそれぞれのクロンバックの α 係数は、「思いやり」因子が.87、「つきあい」因子が.83、「社交性」因子が.89、「主張性」因子が.74 となり、各因子における項目間の一貫性を示した(Table 1 の右側の「日本人大学生の社会的スキルの因子」の部分)。

他の尺度との相関関係

「思いやり」因子は JICS の「自己抑制」因子(.43)および KiSS-18(.41)と中程度以上の相関関係があり、思いやりのある行動をするには、自分を抑制する必要があることを意味する。

「社交性」因子は KiSS-18(.65)、ACT(.63)および JICS の「感受性」(.40)と中程度以上に関連し、社交的であることは当人が全般的に高い社会的スキルを有し、人間関係における非言語的なメッセージを発信したり、受け取ったりする能力が高いことを意味する。なお、日本人大学生の「社交性」因子の他尺度との関連の強弱のパターンは中国人大学生を対象とした研究(毛・大坊, 2006b)と同様であった。

「つきあい」因子は ACT(.49)および KiSS-18(.38)と中程度以上の相関関係があり、上手なつきあいのためには言語的および非言語的な表出の量が多く必要ということを示している。

「主張性」因子は JICS の「曖昧さへの耐性」因子(.44)、ACT(.40)および KiSS-18(.41)と中程度以上の相関関係があり、主張する人は、うまく非言語的メッセージを表出すると同時に、相手の曖昧さに耐えられないことを意味する。以上のように、既存尺度との相関関係からすると、得られた日本人大学生の因子には妥当性があると考えられる(Table 2)。

Table 2 日本人大学生の社会的スキルの因子と既存尺度との相関関係

	思いやり	つきあい	社交性	主張性
ACT	.27 ***	.49 ***	.63 ***	.40 ***
KiSS18	.41 ***	.38 ***	.65 ***	.41 ***
察知能力	.29 ***	.09 *	.25 ***	.20 ***
自己抑制	.43 ***	.11 *	.19 ***	-.12 **
階層関係調整	.32 ***	.13 **	.16 ***	.10 *
対人感受性	.20 ***	.27 ***	.40 ***	.30 ***
曖昧さへの耐性	.06	-.23 ***	.17 ***	.44 ***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001,

中国と日本の社会的スキル因子内容の比較

Table 1 の中国人大学生と日本人大学生の社会的スキルの因子構造の比較結果は以下のとおりである。中国側の「相手の面子」因子と日本側の「思いやり」因子の間に、「85.相手のことを尊重するように気をつけている」、「75.相手の面子を潰さない」、「13.私はいつも相手の立場に立って物事を考える」、「53.話をしている相手の長所によく触れる」、「86.いつも人と協調するように心がけている」、「25.私は相手の意見を尊重する方である」という相手との和を維持する意味をもつ 6 つの項目が共通している。しかし、中国側の因子には、さらに、「72.私はいつもへりくだった態度でいるように心がけている」、「83.目上の人に常に敬意を表す言葉遣いをする」や、「63.つき合う相手の短所に触れることを極力避ける」、「65.いつも相手の面子を立てるよう心がけている」などのような自分を抑えながら、極端に相手の面子を気にしているところに特徴がある。これに対して、日本の「思いやり」因子には、「61.私は細かいところまで人を思いやる」、「10.人に暖かく接する」、「13.私はいつも相手の立場に立って物事を考える」などのような人を思いやったり、人を助けたりするところに因子の特徴が現れているといえよう。なお、中国の「相手の面子」因子と日本の「思いやり」因子に 6 つの項目が共通しており、中国人大学生の得点(37.43 ± 5.57)は日本人大学生(36.26 ± 6.89)より高くなっている(t (929) = 3.02, p < .01)。

中国人大学生と日本人大学生の両集団からともに「社交性」という因子が抽出された。因子の項目には、「9.見知らぬ人とでも、すぐ仲良くなる」、「78.人見知りせず、どこでもとびこんでいける」、「90.自分から積極的に話しかける」、「62.誰とでも仲良くつき合うことができる」、「74.いろいろな人とつながりを持っている」の人に馴染みやすいといった意味を表す 5 つの項目が共通している。この 5 項目の中国人大学生(25.11 ± 6.63)の得点は日本人大学生(23.95 ± 9.62)より高くなっている(t (839) = 2.25, p < .05)。また、中国人大学生においては、「社交性」因子に、「6.私は、周りの人の感情をどうすればうまくコントロールできるかを知っている」、「18.どうすれば周りの人たちをまとめることができるかがわからない(反転項目)」のようなリーダーシップに関する内容が加味されている。

中国人大学生では「友人への奉仕」因子があるのに対して、日本人大学生では友達との「つきあい」因子が抽出された。両者の間には「34.友達と一体感をもってつき合う」、「70.よく友達を家に招く」という 2 つの項目が共通している。この 2 項目の中国人大学生と日本人大学生の得点(10.67 ± 3.00)は日本人大学生(9.56 ± 3.62)より高くなっている(t (944) = 5.39, p < .001)。また、日本人大学生の「つきあい」因子は、さらに「8.よく友人と食事に出かけ

たり、飲みに行ったりする」、「15.よく友達と連絡を取ったり、一緒にショッピングに出かけたり、イベントに参加したりする」などといった何気なくつきあっている項目を含んでいるのに対して、中国人大学生の「友人への奉仕」因子は、「66.友達との間で損得の衝突が生じた時には、相手に譲る」、「42.気前がよく、お金のことでけちけちしない」などといった人づきあいの中の「損得」を意味する項目を含んでいる。

このように、同じ社会的スキルの項目リストから、中国人大学生と日本人大学生各々4 つの因子が得られた。両国の因子を比較する際、「社交性」因子の内容は両国の間で大きな開きがないが、他の因子の比較(中国の「相手の面子」因子と日本の「思いやり」因子、中国の「友人への奉仕」因子と日本の「つきあい」因子)では、重なる項目が存在するものの、因子にあるほかの項目の内容と合わせて考えることによって、それぞれの社会的文脈において、因子が異なるように解釈される。

総合考察

本研究では、中国人大学生社会的スキル尺度の作成に用いられた中国人の社会的スキルの特徴を描く項目リストに基づき、中国での調査と同様な手続きを経て、日本人大学生を対象に調査を行った。因子分析の結果、中国と日本の若者からそれぞれ 4 つの因子が得られ、「社交性」因子だけ両国の間で共通している。その他の因子は両国の固有な文化にあう形のものであった。これは社会的スキルの文化的共通性と文化的特有性の考え方を裏付けることとなっている。

本研究は中国と日本の若者のより円滑なコミュニケーションを実現させる前段階として、「社会的スキル」というキーワードを通して、両国の若者のそれぞれの人づきあいの特徴を明らかにした上で、両国間での異同について比較した。本研究から得られた知見は中国と日本の若者のコミュニケーションのウォームアップ段階において、相手国の人々の対人関係に関する基礎知識の蓄積に役立つと考えられる。

これまで、中国人と日本人の行動様式の違いに関する研究は、主に事例研究や行動観察(天児, 2003; 村山, 1995; 中村, 1994; 園田, 2001)などを通して行われてきた。本研究では、社会的スキルの文化共通性と特有性の枠組みに基づき、中国と日本の若者の人づきあいの内容の異同の解明に、初めて調査研究を通して行った。数値化することを通して、両国の若者の人づきあいの特徴の異同を一層、精確化することができた。

本研究では、中国と日本の社会的スキルの共通項目について得点の比較を行った。いずれにおいても、中国の若者の得点が日本の若者より高くなっている。しかし、Heine, Takata, & Lehman(2000)や北山・唐沢(1995)などは自己評価における日本人の自己卑下傾向を指摘した。また、相川(2007)は、社会的スキルの自己評価アンケートの回答において、日本人は自分が「よくできる」と回答するのを抑制する可能性があることを指摘している。このような可能性を考え、本研究で得られた中国の若者の社会的スキルが日本の若者より高いという結論には慎重になる必要がある。

引用文献

相川 充 (2007). 社会的スキルの国際比較は可能か 菊池章夫(編著) 社会的スキルを測る —KiSS-18 ハンドブック— 川島書店 pp.166-172.

天児 慧 (2003). 中国とどう付き合うか 日本放送出版協会

大坊郁夫 (1991). 非言語的表出性の測定 —ACT 尺度の構成— 北星学園大学文学部北星論集, 28, 1-12.

大坊郁夫 (2003). 社会的スキル・トレーニングの方法序説 —適応的な対人関係の構築— 対人社会心理学研究, 3, 1-8.

Friedman, H. S., Prince, L. M., Riggio, R. E., & DiMatteo, M. R. (1980). Understanding and Assessing Nonverbal Expressiveness: The Affective Communication Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 333-351.

Hall, E. T. (1976). *Beyond Culture.* New York: Doubleday & Company, Inc. (岩田慶治・谷 泰(訳) (1979). 文化を超えて TBS ブリタニカ)

Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. (2000). Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin,* 26, 71-78.

堀毛一也 (1994). 社会的スキルを測る 人あたりの良さ尺度 菊池章夫・堀毛一也(編) 社会的スキルの心理学 川島書店 pp.168-176.

菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する 川島書店

北山 忍・唐沢真弓 (1995). 自己 —文化心理学的視座— 実験心理学研究, 35, 133-163.

毛 新華 (2005). 社会的スキル測定尺度KiSS-18の中国人への適用 対人社会心理学研究, 5, 85-91.

毛 新華 (2007). KiSS-18 の中国人への適用に関する検討 菊池章夫(編) 社会的スキルを測る —KiSS-18 ハンドブック— 川島書店 pp.107-122.

毛 新華・大坊郁夫 (2006a). 中国の若者の人づきあいスタイルについての研究－自由記述調査結果によるカテゴリカルな検討－ 対人社会心理学研究, 6, 81-88.

毛 新華・大坊郁夫 (2006b). 大学生社会技能量表的初歩編制(中国語) 中国心理衛生雑誌, 20, 679-683.

毛 新華・大坊郁夫 (2007). KiSS-18 の中国人大学生への適用 対人社会心理学研究, 7, 55-59.

Midooka, K. (1990). Characteristics of Japanese-style communication. *Media, Culture and Society,* 12, 477-489.

村山 孚 (1995). 中国人のものさし日本人のものさし 草思社

中村 治 (1994). 日本と中国、ここが違う 徳間書店

園田茂人 (2001). 中国人の心理と行動 日本放送出版協会

末田清子 (1995). 「面子」の概念の違いとそれによるコミュニケーション・スタイルの違い —中国人と日本人— ヒューマン・コミュニケーション研究, 23, 1-14.

末田清子 (1998). 中国人学生と日本人学生の「面子」の概念及びコミュニケーション・ストラテジーに関する比較の一事例研究 社会心理学研究, 13, 103-111.
孫 長虹 (2004). 中国人留学生の日本観 多元文化, 4, 217-230.
高井次郎 (1994). 対人コンピテンス研究と文化的要因 対人行動学研究, 12, 1-10.
高井次郎 (1996). 日本人の対人関係 長田雅喜(編) 対人関係の社会心理学 福村出版 pp.221-241.
Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing Japanese Interpersonal Communication Competence. *Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 33, 224-236.
Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Boulder: Westview Press, Inc. (神山貴弥・藤原武弘編(訳) (2002). 個人主義と集団主義 —2 つのレンズを通して読み解く文化— 北大路書房)

註

1) 本研究の中国人大学生と日本人大学生の比較に関する内容の一部は日本社会心理学会第 46 回大会(2005 年於関西学院大学)、日本パーソナリティ学会第 14 回大会(2005 年岩手大学)にて発表された。

Comparison of Chinese and Japanese University Students in the Contents of Social Skills

Xinhua MAO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)
Ikuo DAIBO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

With expansion of human exchange between China and Japan, the troubles in cross-cultural communication increased in the two countries. Before resolve these problems, it is necessary to clarify the differences of characteristics in interpersonal relationship between Chinese and Japanese university-students by using the clues of social skills. In order to practice the comparison, a questionnaire survey with items list that reflect Chinese social skills was filled out by 490 Japanese university-students. Base on the items list, 4 factors were extracted from Japanese university-students. The 4 factors were compared with Chinese students that were extracted in previous study to each other. There was not a significant difference in "Sociability" that is present in both the Chinese and Japanese university-students. Although the items in other factors between Chinese and Japanese are crossover partially, the other items in the factor define the meaning of factors in each culture context. Comparing between the score of crossover items showed that Chinese university-students were high than Japanese. But, with consideration to the trend of Japanese abasement in questionnaire survey, the result of score comparison should be considered carefully.

Keywords: contents of social skill, Chinese university-students, Japanese university-students, comparison study.